

50 周年特別寄稿 シシウド類覚え書

芹沢 俊介*

日本の植物の中には、多様性の中心が中國大陸にあり、その一部が日本まで来ているというものがある。このような植物を調べていると、しばしば、「本店の倉庫の中を見れば何か手がかりがつかめるだろうが、出店のショーウィンドーだけ見てはわけがわからない」という状況になる。このようなことは日本の中でもあって、例えば愛知県の植物の中には「長野県の植物が一寸出てきただけ」というものがあるが、そのような植物は長野県での多様性を検討しないと、愛知県のものの実体ははっきりしない。

この一つの例がシシウド類である。シシウド類は、愛知県では秋咲きの普通のシシウドが三河山地に広く生育しているが、その他に木曽三川下流部の河川敷に、キソガワシシウドと仮称している初夏に咲く植物が見られる。キソガワシシウドは、愛知県西部だけでなく、木曽三川下流部の岐阜県側や三重県北部の員弁川などにも生育していて、開花期が早いこと、著しく大型になること、小葉の先端が次第に尖ることなどの点でミヤマシシウドに似たところがある。大型セリ科植物は、ドクゼリを見るたびに「あった、あった」と騒ぐ人がいたりしてどうも印象が悪く、なるべく見て見ぬふりをして通り過ぎるようにしていたのだが、それでもこのキソガワシシウドだけは、いつか長野県や北陸地方の植物と比較検討して結論を出さなければと思っていた。たまたま一昨年初夏に北陸地方に行ったときにいくつか比較材料が採集できたので検討を始めたが、藤田さんがこの類に興味を持っていることがわかり、そこで一昨年と今年の夏から秋にかけて、一緒に何回かあちこち歩いて観察してみた。

ところが見れば見るほど泥沼、どれともつかないものがゾロゾロ出てきて、わけがわからない。アロザイムでも、はっきりした違いは出てこない。散々頭をひねったあげく、どうなったか。詳しいことは藤田さんが書いてくれると思うけれども、現在の結論は以下のとおりである。

形態から見てもアロザイム酵素多型解析の結果か

ら見ても、極となるのは狭義シシウド、ミチノクヨロイグサ亜高山型、ミチノクヨロイグサ早咲き低山型の3つである。これら3者の中では、後2者が比較的近い。しかしこの3者の間には多数の中間的な特性を持った集団が存在しており、そのためこの3者を明確に区別することはできない。これらの中間的な集団は、おそらく3者間の交雑に由来するものであろう。ただし中間型の中で、秋咲き低山型と呼ばれているもの（サンインヨロイグサにあたる）は、中国地方から新潟県までの日本海側の比較的広い範囲に分布しており、形態的にもよくまとまっている。キソガワシシウドは、形態的には中間型の中の一つと判断されるが、遺伝的にはシシウドに近い。分布域も太平洋側の低地で、他とは異なっている。

それでは、学名と和名はどうなるか。狭義シシウド、ミチノクヨロイグサ亜高山型、ミチノクヨロイグサ早咲き低山型の3つは、一つの種 *Angelica pubescens*（ただしエゾニユウとの関係は更に検討を要する）としてまとめられるが、その中で亜種の階級で区別するのがよいと思う。さまざまな中間型は、3者のうち2つだけが関与していそうなものも3つとも関与していそうなものもあるが、それ以上はとても区別できない。3つの基本型から明確に区別できるものではないけれども、学名上は一括して3つの基本型と同格に扱い、やはり *Angelica pubescens* の中の亜種とするのがよい。中間型の中でサンインヨロイグサとキソガワシシウドは、分布域の特徴があり、形態的にもまとまっているから、変種として区別するのがよい。

和名の方は、狭義シシウドは「シシウド」でよいだろう。狭義ミチノクヨロイグサは亜高山型にあたるもので、もともと「ケナシミヤマシシウド」と呼ばれていたものだから、元の名に戻す。ミチノクヨロイグサ早咲き低山型は適切な和名がないから、「ユキグニシシウド」と呼ぶことにしたい。中間型は一括して「ミヤマシシウド」になり、その中でキソガワシシウドとサンインヨロイグサが区別される。ただしサンインヨロイグサは、シシウド類に含まれるものでエゾノヨロイグサとは直接関係がないから、

* 愛知みどりの会

〒490-1131 愛知県海部郡大治町長牧浦畑 198-1

「サンインシシウド」と改称するのがよいと思う。

あとは藤田さん、がんばってね！